

持続ある町並み保存のあり方を探求する活動

- 広島県・呉市御手洗重要伝統的建造物群保存地区を事例に -

吉田倫子（代表者：博士後期課程・宇高研究室）

キーワード：地域連携、重要伝統的建造物群保存地区、居住の継続、町並み保存意識

1. 活動の目的と活動内容

今年、広島県呉市御手洗重要伝統的建造物群保存地区（以下、御手洗地区）が文化財に選定され、29年目を迎える。そうした中、高齢化率は50%に達し、人口減少が顕著で空き家が増加している中で、コロナ禍により観光客が減少し、盛り上がりつつあった活動も現在低迷している。そこで、住民にとっては住まいとしてあり続け、さらに観光客も取り込めるように、現状と課題を調査し、SDGsの目標11「住み続けられるまちづくり」を住民と共に考えていくことを目的に研究調査を行うものである。

活動の内容は、御手洗地区が町並み保存を継続し、暮らしやすさを持続できるように、①御手洗地区の現状とこれまでの変化を把握し、②御手洗地区の住民を対象とした町並み保存と暮らしやすさを考えるアンケート調査を実施する。③調査結果を共有し、暮らし続けるための方策を住民と一緒に考える。

活動メンバーは、宇高研究室に所属する代表（大学院生）と4年生2名を中心とした研究室のメンバーである。連携先となる地域組織は、重伝建を考える会（呉市御手洗重要伝統的建造物群保存地区の住民団体）である。活動にあたり呉市文化振興課の協力を得た。

2. 御手洗地区と重伝建を考える会の概要

御手洗地区は瀬戸内海の中央部に位置する大崎下島にある江戸期に商業で栄えた港町である。1994年12月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。地区指定への住民の合意は台風被害の復興が後押ししたと言われている。選定された当時は離島であり、行政区は豊町であったが、2008年の架橋により本州と陸続きとなった。さらに2013年に呉市と統合した。1960年代までは広島県内で随一の人口密度を誇る町であったが、現在は御手洗地区の住民は200人程度である。

重伝建を考える会は選定と同時に設立され、勉強会やイベント等を実施して住民の盛り上がりを見せていた。コロナ禍以前は地域おこし協力隊や若いボランティア等により空き家活用や移住が進んでいた。重伝建を考える会のウェブサイトが作成され、

「御手洗地区町並み保存憲章」が作成された。しかし、コロナ禍により観光客の足は遠のき、空き家活用による店舗経営も週末だけの開店となっている。さくら部（重伝建を考える会の女性メンバー）はコロナ禍に関わらず、活動を継続している。

3. アンケート調査及び現地調査の概要

3.1 アンケート調査の概要

アンケート調査はこれまで活動グループが過去に実施した調査（1997年、2007年、2013年）と同様の方法および内容で実施する。調査項目は、町並み保存に対する賛意、制度の認知度、家屋や周辺環境に対する満足度、家屋の将来に対する意向等を設けている。

アンケート調査は豊市民センターを通して自治会の組長に配布された。さらに、組長から各世帯（118部）に配布され、9月28日～10日の期間で回収を行う。その後、アンケート票のデータ入力、分析を行う。

調査結果の公表については、参加の4年生2名が卒業研究として発表を行う他に、住民に向けての報告会（重伝建を考える会の理事会）を2024年1月18日（木）19時に実施する。そして、アンケート結果の概要版を、自治会を通して配布する。

3.2 現地調査の概要

(1) インタビュー記録より（抜粋）

インタビューは、2023年9月15日（金）10:40～11:40 御手洗地区の港町交流館にて実施した。重要伝統的建造物群保存地区を担当する呉市文化振興課の文化財担当者、重伝建を考える会幹部らに面会し、話を伺った。下記にインタビューした内容を一部掲載する。

<町並み保存>

・修理修景事業の要望は今年度20件待ち。空き家活用者からの希望あり。二巡目の修理・修景はない。医院（洋館）のみ塗装工事を3回目（10年に1回）。修理修景事業の件数は、ここ4年間は6-7件程度で順調である。

・空き家バンクは1件のみ掲載され、売却等が行われた。御手洗などでは交通の便が悪く役所に届ける

ことが面倒ということもある。また、建物が傷んでおり、すぐに住める状態でないことも登録しない理由の一つ。浄化槽がない家もある。

＜重伝建を考える会＞

・130人のうち、島外は70人くらいであるが、年に数名の退会がある。島内については高齢になり、施設に入所したり、島外の縁者のもとに転居するなどを理由に退会希望がある。

・現在、定例の行事は行っていない。今後の予定としては、来年度30周年事業を行う予定である。何をするか、話し合いもできていない。次の世代がやるしかない。当初の思いを継承していくことが必要である。アイデアを考えるより、負担感が先に出てくる。そのため、それ以降にかかわった人が主体になり、掛け合わせていくが必要になってくる。

＜居住環境＞

・高潮対策で、海岸に堤防や防潮堤の整備が進んだため、ここ10-20年近く台風が来ていないので、災害はない。火災は少なく、消火活動がしっかりとできている。

・ガソリンスタンドは1件廃止となり、島内は2カ所のみ。スーパーも1件のみで、移動販売を行っているし、島外からの移動販売もある。

・豊小学校（久比地区。豊浜町と豊町の合同）は今年度全校で25人。

（2）現地調査の様子

現地調査では、家屋の修理修景の様子、観光施設、空き家活用等の様子を確認した。また、現地で住民と話しをすることができ、一般の住民がどのように感じているかをお尋ねした。



写真1 現地調査の様子



写真2 町並みを彩る一輪挿し（重伝建を考える会さくら部の活動）や町並みの様子

3.3 調査に参加した学生が学んだこと

プロジェクトメンバーである4年生2名が現地調査に同行した。メンバーによる御手洗地区の印象や現地でわかったことを下記にまとめた。

現地に実際に足を運ぶことで、データやネット上から見る御手洗からは分からなかったことを感じることが出来た。まず、第一に地図上で見る以上にアクセスが悪いということを感じた。橋が開通し呉市本土と陸続きになったことで、船の需要が低下したこともあり、一本遅れると本土まで帰れなくなったりするほどで驚いた。また今回の調査で出会った、地域住民と実際に会話する機会があった。そこでは御手洗の少子高齢化の現状を感じた。昔は人口も十分で子供の数も多かったが、最近では小学校や中学校も減り、子供の数が極端に少なくなっていることを住民が肌で感じていた。今後御手洗が重伝建地区として持続するためには、少子高齢化の問題は避けては通れないと感じた。若者が歴史的な町並みに住みたいと思うような政策や街づくりを進めていくことが大切だと感じた。（4年T）

長い調査の中で、住民の考え方や重伝建を考える会の意識の変化を感じ、年齢や性別などの社会属性によって守りたい気持ちや盛り上げたい気持ちがあるのだとわかった。具体的な定例会や会の施策が弱くなっている中、島外の人である若い世代が新しく盛り上げようとしている雰囲気を感じて、若い自分もワクワクする気持ちを抱いた。しかし、研究対象として御手洗地区を見ている中で、居住環境への不満や災害があまり強くないなど事前感じていた環境とは違う結果を現地に訪れることで学び、少し驚いた。これらすべて感じたことが現地調査の結果であると思い、良い経験であったといえる。伝建地区として人口減少や高齢化、空き家問題などあらゆる場でこれからのあり方について心配になったが、島外からの参入や私たちの存在により価値をあげて全国の人に知ってもらいたいと思った。また、来年の30周年の施策に期待して将来どう変化していくかより気になった。（4年F）

4. 御手洗地区の今後の展望や課題

インタビューでも明らかになったように、重伝建を考える会自体の活動が停滞し、組織自体も高齢化等により弱体化している。活動自体を継続していくためには若い世代とどう協働していくか、さらに関係人口を増やす方が必要である（島外会員に空き家活用事例や補助制度の通知）。また、持続的な生活についても課題が多い。伝建地区の維持には、地域経済、福祉、交通等他分野との協議が必要である。

本活動は2023年度兵庫県立大学・環境人間学部EHC 大学・地域連携活動助成として実施した。